

平成30年度 自己評価計画書

石川県立大聖寺高等学校

1 3年間を見通した進路指導体制を一層充実させ、生徒に高い志を持たせて、一人一人の進路実現を図る。

具体的取り組み	主担当	現状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定基準	備考
① 放課後補習を効果的に行い、大学入試に対応できる基礎学力定着と応用力養成を図る。	進路指導課 各教科 3年学年団	習熟別補習が定着して数年になり、形式は整ったと思われる。今後の課題は、大学入試に対応できる確かな学力をつけるための内容(教材等)のブラッシュアップである。	【満足度指標(生徒)】 放課後補習が効果的に作用している。	効果的に作用していると評価する生徒の割合が A 90%以上である。 B 85%以上である。 C 80%以上である。 D 80%未満である。	C、Dが出た場合、 主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	昨年度「役立っている」「どちらかといえば役立っている」 82.5% (第2回学習実態調査)
② 「総合的な学習の時間」における大学・学部・学科研究等を通して、上級学校や職業について学び、高い志を持たせるように努め、生徒一人一人の進路実現に資する。	進路指導課 学年団 教務課	キャリア意識の定着と高揚を図り、学習意欲の向上につなげようとしている。このことと、実生活での柔軟な現実対応力(特にコミュニケーション能力)の養成とをリンクする方策を探ることが今後の課題である。	【満足度指標(生徒)】 副担任と担任が連携し、将来の進路目標を設定するための説明や指導が十分になされている。	進路を考える上で「総合的な学習の時間」が参考になったと思う生徒の割合が A 90%以上である。 B 80%以上である。 C 70%以上である。 D 70%未満である。	C、Dが出た場合、 主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	昨年度「参考になっている」「少し参考になっている」 1年74.8% 2年68.9% 平均71.9% (第2回学習実態調査)
③ 個人面談を通して生徒理解に努め、生徒個々に応じた進路指導を実施し、3年間を見通した進路指導体制の充実を図る。	進路指導課 学年団	寸暇を惜しんでの面談が十分に機能していることで生徒と教員との距離が近い。昨年度は3年次の数値が落ちたが、今年度は回復を期したい。	【満足度指標(生徒)】 担任との面談が自分の進路目標設定や進路実現に有効であると考えている。	進路を考える上で担任との面談が参考になったと思う生徒の割合が A 95%以上である。 B 90%以上である。 C 85%以上である。 D 85%未満である。	C、Dが出た場合、 主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	昨年度「担任との面談が役立っている」「もっと面談したい」 1年93.6% 2年93.3% 3年81.3% 平均89.3% (第2回学習実態調査)
④ 大学合格者数の数値目標を達成する。	進路指導課 3年学年団 教務課 各教科	本校における高学力層の受験対応力を伸ばし切れていない。中学力層の引き上げも不十分である。しっかりしたグループビング指導の確立が喫緊の課題である。	【成果指標】 国公立大学合格者数	国公立大学合格者数が A 60人以上である。 B 50人以上である。 C 40人以上である。 D 40人未満である。	C、Dが出た場合、 主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	昨年度の国公立大学合格者:41名(現役39、過年度生2) *昨年度3年生は、前年度より1クラス減
			【成果指標】 金沢大学合格者数	金沢大学合格者数が A 15人以上である。 B 10人以上である。 C 5人以上である。 D 5人未満である。		

2 授業と家庭学習とにより学習内容の確実な定着を図るとともに、「主体的・対話的で深い学び」を実現するための研究と実践を進める。

具体的取り組み	主担当	現状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定基準	備考
① 中高交流研究授業、校内公開授業など諸研究授業の実践・参観及び研究協議会やICT活用研修会を通じて、教科指導法等の技能を高め、生徒の思考力の向上に努める。	教務課 各教科	昨年度は多くの授業で生徒が発展的な内容に触れ、より考える機会が得られたと答えたが、生徒が主体的にさらに深く学ぶようとしているかを問う項目として、継続して調査を行いたい。	【満足度指標(生徒)】 授業において自ら深く考える機会があり、学習に対する大きな刺激となっている。	授業において、自ら深く考える機会があり、学習に対する大きな刺激を得られたという生徒の割合が A 80%以上である。 B 70%以上である。 C 60%以上である。 D 60%未満である。	C、Dが出た場合、 主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	昨年度 国語 82% 地公 77% 数学 79% 理科 76% 保健 83% 英語 85% 平均 80%
② 家庭学習時間調査を通じて、生徒の学習状況を把握するとともに、学年団と連携して各種課題提出の徹底を図ることにより、家庭学習習慣の確立に努める。	教務課 各学年団 各教科	学年平均は、3学年とも目標の学習時間を達成しているが、達成している生徒の割合が低い。生徒一人ひとりへの声かけを欠かさず、重点的に取り組むたい。	【成果指標】 1日平均の家庭学習時間を1年生120分、2年生120分、3年生220分とする。	目標時間を達成している生徒の割合が A 70%以上である。 B 60%以上である。 C 50%以上である。 D 50%未満である。	C、Dが出た場合、 主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	昨年度 1年 63% 2年 67% 3年 45% 平均 58%
			【満足度指標(生徒)】 家庭での課題学習が効果的であると考えており、自ら積極的に取り組んでいる。	家庭での課題学習が効果的であると考えており、自ら積極的に取り組んでいる生徒の割合が A 70%以上である。 B 60%以上である。 C 50%以上である。 D 50%未満である。		
③ 土曜補習(セゼミ)を効果的に実施し、学習における基礎基本の定着を図る。	教務課 各教科	土曜補習(セゼミ)については、「やらされている感」をもつ生徒が多い。生徒の多様な進路目標を念頭に置いて、時間割等を検討する必要がある。	【満足度指標(生徒)】 土曜補習(セゼミ)は学習意欲の喚起、基礎学力の養成に効果があると考えている。	効果があると考えている生徒の割合が A 80%以上である。 B 70%以上である。 C 60%以上である。 D 60%未満である。	C、Dが出た場合、 主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	昨年度 1年 71% 2年 70% 平均 71%

3 文武両道を目指して部活動や生徒会活動の活性化を図るとともに、地域行事等への積極的参加にも努め、明るく活力ある学校づくりを推進する。

具体的取り組み	主担当	現状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定基準	備考
① 部活動の内容を充実させ、活性化を図り、文武両道を目指す。	生徒会 指導課	1年生は全員部活動に加入しているが、活動に満足している生徒は57%にとどまっている。時間が経つにつれて低下傾向にある。より満足度を高める工夫が必要である。	【成果指標】 1年生の部活動に対する満足度を高める。	満足している1年生の割合が A 70%以上である。 B 60%以上である。 C 50%以上である。 D 50%未満である。	C、Dが出た場合、 主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	昨年度 「充実感を感じている。」 56.8% 第2回学習実態等調査

具体的取り組み	主担当	現状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定基準	備考
② 運動部の競技力向上を図る。	生徒会指導課	弓道、体操、陸上競技、女子サッカーが好成績を収め、昨年度の県高校総体では総合順位が25位であった。	【成果指標】 県高校総体で総合順位20位以内をめざす。	県高校総体順位が A 20位以上である。 B 21位～25位である。 C 26位～30位である。 D 31位以下である。	C、Dが出た場合、 主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	平成27年度は28位。 平成28年度は33位。 平成29年度は25位。
③ 部活動が地域や中学校との連携を図り、地域に愛される学校づくりを目指す。	生徒会指導課	多くの部活動が地域のボランティア活動や中学校との合同練習を行っているが、地域や中学校に活動が十分に認知されていないのが現状である。	【成果指標】 全28の部活動が年1回以上、地域や中学校と連携し、活動を行う。	地域や中学校と連携し、活動を行った部活動が A 25以上である。 B 20以上である。 C 15以上である。 D 15未満である。	C、Dが出た場合、 主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	昨年度 24の部活動が地域または中学校と連携して活動した。
④ 郷土独自の歴史や文化を知り、郷土に対する親しみや誇りを持つよう、地域探訪を計画・実施する。	総務課 1年学年団	郷土の伝統文化に触れる機会が少ないために、それらに対する興味・関心が乏しい。	【満足度指標(生徒)】 設定されたコースを興味・関心をもって巡ることができる。	参加してよかったと感じる生徒が A 80%以上である。 B 70%以上である。 C 60%以上である。 D 60%未満である。	C、Dが出た場合、 主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	昨年度 「良かった」:73%
			【満足度指標(生徒)】 郷土の歴史・文化について理解が深まり、郷土に愛着を感じる。	郷土に対する理解がかなり深まったとする生徒が A 60%以上である。 B 50%以上である。 C 40%以上である。 D 40%未満である。	C、Dが出た場合、 主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	昨年度 「かなり深まった」:48%
⑤ 山林ボランティアや地域清掃活動など、地域に貢献する取り組みに積極的に参加する。	総務課 学年団	学校全体としては、さまざまな取り組みを行っているが、主体的にボランティアに取り組みもうとする生徒の割合は多いとは言えない。	【成果指標】 さまざまな地域ボランティア活動に積極的に参加する。	ボランティア活動に参加した生徒の中で「参加していきたい」と感じる生徒の割合が A 80%以上である。 B 70%以上である。 C 60%以上である。 D 60%未満である。	C、Dが出た場合、 主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	6月9日の地域清掃ボランティアに2年学年が参加。 10月の山林ボランティア参加数:22名

4 挨拶の励行や交通ルールの遵守などの指導を丁寧に行い、基本的な生活習慣の確立と規範意識・マナー意識の高揚を図る。

具体的取り組み	主担当	現状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定基準	備考
① 登校指導や挨拶運動などを通して、挨拶の励行及び正しい制服の着こなしと規範意識、マナー意識の高揚を図る。	生活指導課 学年団	交通マナーやJR乗車マナー、服装容儀、挨拶において年々向上していると感じられるが、さらなる指導の必要性が感じられる。	【満足度指標(保護者)】 生徒の挨拶がしっかりと行われていると感じている保護者が	A 90%以上である。 B 70%以上である。 C 60%以上である。 D 60%未満である。	C、Dが出た場合、 主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	昨年度 「規範意識、マナー意識が向上したと感じる」69% 保護者アンケート
② 遅刻の管理をし、基本的な生活習慣の確立をさらに推し進め、学習環境を充実させる。	生活指導課 学年団	昨年度は悪天候の影響もあり遅刻が増加した。基本的な生活習慣を確立し、落ち着いた雰囲気朝学習を始められるよう指導を徹底したい。	【成果指標】 1日の平均遅刻者数が1人以下になることを目指す。	全体の1日平均の遅刻者数が A 0.5人以下である。 B 1人以下である。 C 3人以下である。 D 3人を超える。	C、Dが出た場合、 主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	平成26年度 0.7人 平成27年度 0.5人 平成28年度 1.1人 平成29年度 1.5人
③ いじめのない学校づくりをめざし、共通理解に基づいて、全職員がいじめの早期発見・早期解決に向けて連携する。	生活指導課 学年団	日常の指導やいじめ防止のための講演会などの取組をすすめるとともに、アンケートや生徒との面談などを通じて情報収集と指導を図っている。	【努力指標】 課題のある生徒への対応で、学年団や教育相談、生徒指導などが十分に連携している。	連携しているとする教員の割合が A 80%以上である。 B 70%以上である。 C 60%以上である。 D 60%未満である。	C、Dが出た場合、 主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	昨年度 「課題のある生徒への対応で、学年団や教育相談、生徒指導等が十分に連携している」85% 保護者アンケート

5 校内の業務の精選・効率化に取り組み、時間外勤務時間の縮減に努める。

具体的取り組み	主担当	現状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定基準	備考
① 学校全体や担当する分掌において、業務の精選・効率化に取り組む。	全員	H29年度の時間外勤務時間は平均56.6時間で、全日制高等学校の県平均よりもやや多く、内、約3割を校務分掌等の業務が占める。	【成果指標】 業務の精選・効率化につながる取組を考え、実行する。	担当する分掌において、具体的な取組を考え、実行した教員の割合が A 100%である。 B 80%以上である。 C 60%以上である。 D 60%未満である。	C、Dが出た場合、 主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	新規
			【満足度指標】 学校全体の取組として、業務の精選・効率化が進んでいると感じられる。	学校として多忙化改善のための取組が進んでいると感じている教員の割合が A 100%である。 B 80%以上である。 C 60%以上である。 D 60%未満である。	C、Dが出た場合、 主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	新規
② 部活動運営において、時間を意識した効率的な指導を行う。	部活動顧問	H29年度の時間外勤務時間は平均56.6時間で、全日制高等学校の県平均よりもやや多く、内、約5割を部活動指導が占める。	【成果指標】 適切な部活動計画を立て、年間を通じて遂行する。	適切な計画を立て、かつ、おおむね実行できたと考える教員の割合が A 100%である。 B 80%以上である。 C 60%以上である。 D 60%未満である。	C、Dが出た場合、 主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	新規